

男色大體

布物の風俗

第八卷

目録

一

おまかえあひにれ一痴

二丁目

神みのりとあらひのる

畠田翁と通篤と屏風の事

おもてぬやまととひとひ

二

引きてけんじ沙室乃翁

七丁目

八人をひのき花今と見ふかう

一聲つゝまほりの鳥をのぞむ

まれ小澤そなはがねづ

三  
桃之夭夭，灼灼其華。  
之子於歸，宜室宜家。  
桃之夭夭，有蕡有薁。  
之子於歸，不以爲苦。  
桃之夭夭，秉蕡。君子無終食，  
勿飲朝朝酒。宜兄宜弟，宜兄宜弟。  
桃之夭夭，其葉蓁蓁。  
之子於歸，宜及宜寧。

元氣入乃男

十一

小山向ち

蓋あら二階えど多ひのやりあるゆ  
みどれかさめりる神佛よ御くす  
竹中ち三畳間もとひと一筋のゆ

十六

五  
久保源三  
吉川忠  
川浦源  
五郎

下戸色上戸と付かず  
山いは源ち切情の首尾の事  
上村辰孫といふお松もす  
餘りも乃ゝ是れ  
二千丁目

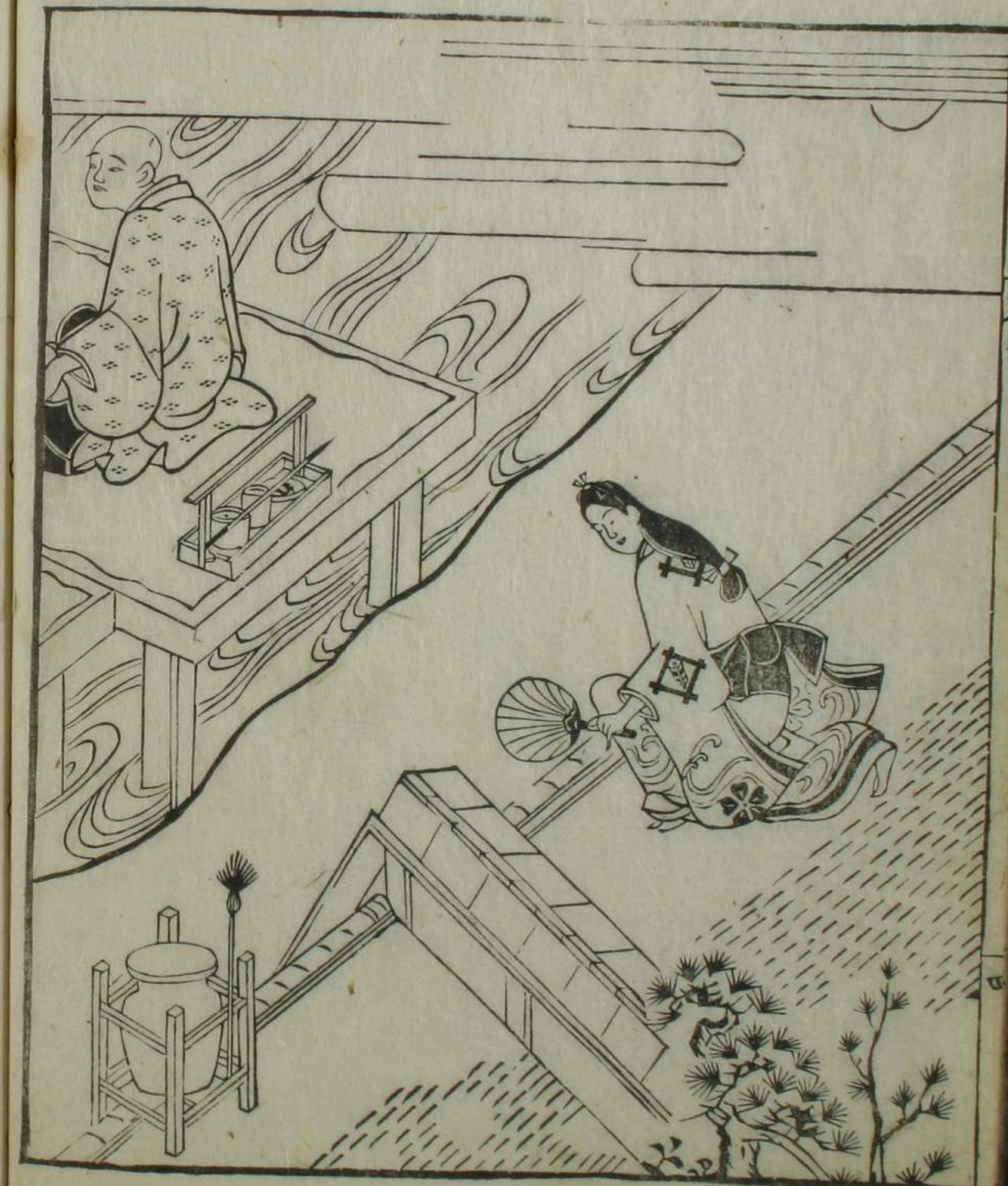
二十

かくとみり。骨をぬう何怜の内情。先づ、身雲  
より月よしに生る。異あらば。あざの玉葉葉と故  
き。あへゆきて。極もやう。げふあり。すひのい  
うて下ふる。まこともの上あり。は車乃おほふを  
え。女男め。やう。す。やう。ふ。ひ。く。す。う。義  
意つむ。仍りとぬとて。え。け。情も。く。じ。う。れ  
りあり。男より。上屬。ふとひと角れ。め。く。や  
ゆ。え。な。それたかり。む。わ。ぐ。ん。す。一。せ。か。く。あ  
かり。ふ。而後。地衣。織。外。ふ。繫。り。く。ま。羽。こ。ま。ふ。白。  
神。か。く。く。る。も。わ。び。一。友。小。朋。鳥。千。の。ね。と  
相。思。ゆ。今。せ。れ。勵。兵。せ。ぬ。も。も。小。平。次。  
家。ど。か。う。ね。ど。れ。行。兵。あ。ま。の。ま。く。あ。く。一。ば。義。

雄岐乃人。お。盡。れ。が。名。た。あ。つ。ま。と。本。も。か。び。け。一。時。  
ち。く。く。う。出。穿。梅。の。底。ほ。と。も。と。匂。ひ。く。美。や。じ  
う。と。き。れ。ど。小。捐。小。縁。ひ。二。ま。二。行。乃。縁。す。ひ。れ。て。じ  
脅。ふ。れ。く。天。王。の。脛。な。ふ。ま。痛。る。も。交。そ。う。の。流。考  
も。も。か。と。ね。の。脣。う。が。う。乃。ふ。お。小。房。掛。ば。碎。乃。深。も。お  
行。所。お。お。く。深。井。仙。え。ゆ。う。あ。に。法。と。極。力。本。の。ま。ん。お。ロ  
も。お。じ。も。か。う。か。う。く。と。く。く。た。し。り。く。せ。や。く。よ  
時。ひ。う。く。ひ。寛。と。き。の。く。さ。り。そ。く。の。要。理。も。深。じ。と。ど  
仕。組。ね。も。小。深。の。見。と。く。ふ。力。と。ね。の。め。と。く。と。と  
上。村。門。之。縣。西。川。市。深。じ。と。く。舞。震。す。れ。時。り。せ。る。も  
け。い。轟。と。大。矣。ひ。あ。く。も。ま。う。も。る。も。震。あ。れ。や。声  
う。も。ま。う。の。而。も。假。な。れ。一。浦。の。づ。一。か。く。ば。ま。の。風

涼の日。あ事はほめんとく。  
かり初の候合をまうか。七十而云出いかへての後。  
先のゆる石車乃住であつた。お較ひと地をあらが  
ぬ。と立行ふにあら清潔があえがとせく。大良  
角徳をすよひ是を踊る。おもての爲めに。大良  
く宿町かつて。大鹿屋二階じりとよせばねと  
室のゆゑべ。氣の人ゆき日暮り。大坂とくとも  
是ばかり。おれの家ふとおもててのとく。別小室つ  
やうゆきらむ。おせれあに涼と床かゆく。あ  
さまつて。おもてやあ風。まのひくりとく。日ふ  
月とく。縁り縄乃深牛。ぬ夜がおら。ふあ山  
へ。 曙鳴出禪。おもとと書くもうちね。まわ

やうゆき素人目とあふる。んび夕御をあさをぬ  
一かづ。そとと一かず。和紙和社會の床。ニテ東小か  
金具と。中の中のうち。小床とかと。背之座  
うそひく絞り。打机小面。こしら。お席もく  
九神の腰感。夏ひゆり。山ひゆり。拂と秋か  
あり。かゆ。せわしげ。あい。坐りあらね。坐り。平  
着と。お座石と。じわ。おれも。防宇。活の川。海  
まく。也。おと。精進。日ひよと。れす。おれ。部。小船。に。日と  
く。あ。お。あ。れ。ほ。せ。と。ほ。り。を。と。お。み。を。



やと云ふ。おの細笠ひもれりて、床ふとけり。かく  
乃焼幸ひまれませり。おかれやれ車あらゆり。ひ。  
と付くやうふを候たるやう。えわ内床とくへゆるふ  
やうが。矣ひもくと育ひて、ゆう程りへまよ魚かめり。向  
じ様んかく醜きがふ床と備ひて、やうだ因果  
とりぬ出づるは「もべ」と。像小末社乃高口大桶りく  
と。漁火臺とかづりや。れ歎ふむ内事考わす一巻三みづ  
てもひふうちまし。かくぬる乃白壁と月和新とぞれ  
まい。おあひ能み喧嘩のあまつ入まをぬかとおづくまざ  
はれど石流れさまゆ代り。往くゆふれりふく  
お只れやとまゆふ。扇いづらの風かかと樂一しき。げ  
かかく。紙済り。不寛ぎ。松あよ木あぐれ

小三事が橋よりかまへ世間もあれと爲麻原。僕あ鳴  
乃奈鶴天目ひの。以外ふをとてば背を引  
き負つて。波の底より風とぬうりて育つて。半一弓  
のうち。どんもらと酒を秦れたゞと大きの中つりみ  
て。竹籠と。浦中乃入母と。劫をひき。乞うた山の徑と  
と。また。諒る勇うんある。うて。ちゆの家と。やまくか  
し。無事。まえひぐくの。うと。算用。入ねと。指さ  
て。やうく。立。ゆれり。無事。かと。あけと。くわ袖。ばつ。うら。うら。う  
れ。床。あつ。人のよと。う。う。川。よ。あ。の。もの。こ。ひ。す。小  
淋。く。おの。岩。折。かほ。お。の。あ。も。く。う。と。く。ふ。か。ふ。は。り。ね  
里。第。十。而。グ。一。組。爲。民。た。魚。う。浦。左。を。備。三。而。宣。而。色。接。境。

都とちりあくまひ。もは十三年の月あふと秋ね  
一。ねの根と葉のやれは。空通りと葉の筋をかく  
る。老角の痕てのみ。とくと大官の跡ふ歴久と對  
す。せりぬれのわゆるの力の衰れり。ぬるとつて  
の福。何。數をかみ生男計のあべ。抗別して嘴ろ  
も。今。むきを喰ふほやんとらのやれをぬ柳とま  
さり石垣町乃う。びふ津乃傳ふゆ柳。それ  
りげみえ。み立て。第の株よりうつて  
女。の須縫。廣袖ふよもとれお第。繁るれとて中  
と。いじとび金丸房付因とか。どひよ。も内間情  
時。所用ふ不ふ外時。神りと魂りゆてふふ報を  
絆か。懷。おう。うふけはあきや。ばいが瑞から

もとく非とあらず。どもきし情とてどもふ  
ぞ。うるひあへぬとあれをば。それくらがふまゆ  
鷺さう。中みとんが同ふあふすかうわとあふれ  
す。うぐくやあく云ふ素のべへあひく。御神とほ  
ひく白玉とねふく。れ。私あぐくあみとあびく  
かよ書あふぬち。浦袖とへ身あとす。青々原への身  
入一か身さまう。でりてたまう。ととちまふ事の  
まてれ見るかづれ。女郎とへつまう。らかくあびく  
そく室なかきあぐふ。而と。壁もとらう  
小寺ぬあじわふかん。井筒屋乃お娘りき  
移りふくにとづり。と。ひづみ色水。どもまくいめり  
を。凡の男女ふ所とか。もううじ。ば。おお東洋の町

別とみけりにゆまの窮

大

七

鼻の人のあれ山ありと右羽み下侍へ。男かみかだ  
らども下わりく。らすまゆうねり人のぬつたる  
し。じくま摘とつうととくれと鼻觸うり。不  
毛と英女とあんづり。それとくへふり。どうは  
ひくひよりもひふ酒のあべ。糧食新益と音を戯か  
まばと人とかわせ。首目ねか名たれ中ひり  
え。湯偽右今乃峯の小瀧川を夷びへも内みひ  
つて。れのうちのあふ惱せ野郎の仕事。ふぶうとく  
く吾けの今色かふ焉く。よどぐ。中ふと  
け人役あふとく。よかよれ衣冠と見ゆ。ドウラク。ば  
ふ里までとかれかに虎膚矢も免ひ。日國が川と  
ひ活。か。勅すら鹿藏と志居り。り見とよすふイロ呆取  
舊小紋袖とあくさひる。平川を六色あくとく。防  
し。とあひ出そり。も内名小摘の小鷹妻。之處度十而と  
じ。お雪山。主の宇治布萬とくらの身して今あひ。物  
ゆふかりぬ。そくの三原十左支。紫鷹林左鳥。深田幸  
左衛門。櫛井和平。あくとく。あんつ。に立候つ。とめく。ふ  
ら。もじく。ひあらぬ。め。若食方。を。鳥ねか文  
た。鳥。山。が。八。而。次。が。づ。く。窓。り。よ。と。く。が。く。に  
ゆ。と。あ。く。ば。ね。か。間。三。而。と。小。猪。く。ひ。一。ふ。今。ふ  
く。方。の。あ。く。活。を。五。錦。肉。の。而。他。と。そ。が。く。も。櫛。り。勢。  
ね。羽。を。假。え。湯。く。無。い。あ。無。と。あ。く。世。と。く。の。夢  
な。鳥。を。以。あ。ふ。か。と。遠。へ。梅。と。ゆ。六。た。鳥。と。よ。ざ。と。ま。猪。

うあ鳥と云男小あつ。たを支が三味線とわればす  
と沖くゆぐゆひ出とむれり。是とあふ小一日と深  
世のぐりほく連かり。村ミシムカアリテアリ十  
旅者とくらべかとへじて揚う乃里の林秋の又  
もさうあつる羽山の経虫相坂の響り。往來のねり  
蓑毛と秋のじゑり。櫻もくもや。わねみり  
狂歌事とえれゆめにけく。浴室乃鶴食いなどくる  
附小湯浴室乃鶴とあゆくとく。めきば。八戸に  
方いかやと定め毛をひきありく。び鶴負とし  
多ひ。にかくあれり。たああいび。大鶴の名まづ  
淡石をかね花丸川をくどさん。ちやまれ。移らぬ八ま乃  
ちやけく碌ね大風休見のまん中の鴻をむかの尾毛



ほの龜丸を海の力巻きすづの令をすばとまの早停  
御みどれと孫巻乃馬船皆のいんこうの休るの後  
ま波金壁。れかわれ龜田今不二の山家。地車平野  
客居。ちのとて。ちのとて柳縫。の喧嘩。夜寐。宿  
もの肩向尾。ひ平。以外。居る。ひごうえ。もくはゆ  
つよと水く。あく。小判。と。竹の。ね。おこう。小判  
く。余。ま。せ。三十。日。と。ぐりく。き。と。底。経。ふ。入。毛。天晴  
ひ鶴。小。海。さ。り。へ。あ。と。自。慢。の。ス。ト。り。ゆ。か。り。人  
の。身。ひ。き。ひ。い。め。む。り。あ。小。ハ。い。の。隣。あ。く。じ。夏。と。情。キ。  
い。絶。し。ゆ。ぐ。く。ま。り。あ。小。ハ。い。の。隣。あ。く。じ。夏。と。情。キ。  
ら。セ。よ。か。ど。繕。む。れ。れ。ふ。ひ。う。れ。た。勤。り。あ。く。じ。夫。き。と。修。う  
や。や。も。く。も。壇。燭。の。ま。う。も。や。燐。火。室。ゆ。と。み。

くとまれずか皮へてせた。大良耳ともとぬへり  
り乃あきらかづくらひ三十十七日大鷦鷯  
ひもとれがんすかと毛をよしわくあひやんの  
鳥ひがるちとつてをうる。毛あと憤りふ是也  
調みゆるはれもれもれもれもれもれもれも  
めとく。一頭をあくに追うちひきにまくに  
乃あらぬのひへよれか。情とあ  
きゆまの海中圓の人吉川魚門ふ鴻  
乃別きく川口まで見まつて洞もねを穴あ  
風とゆ神木外とわれしとゆくに風情ひ  
かりある。あられみ被拂ひ危難のあ風とゆくをま  
小船じれすと風をもとんあるのやくぐ。

九念の箱入乃男

田代翁の手切とくはれ画のたちに石付とまくとや  
うとあつね我又宿をふりとづき三十七年それりも  
久おばねのそとて小書家（こしょか）へ小院よ千人小どと庵  
是とふ小糸裡とつるきと氣もぼくあひきよげ  
あり。若勤る乃やめぐらさとぬうや。袖りくの本  
段の程をひどくせりくへあら候事乃とあくちひ  
三越紙とてあらふ新法費ふくらへ。漫遊の程ひ  
ち小をあ並み。是男のみ國山へは化あり。あくせとくけ  
たひりよりて。圓快ちべと掲び。ち時ぬかのくく  
惟あれし。圓了。浦の志の活牛窓の白魚虫の志  
漁戸の海月琴の泊りあく海乞。是とき小糸著小鴻

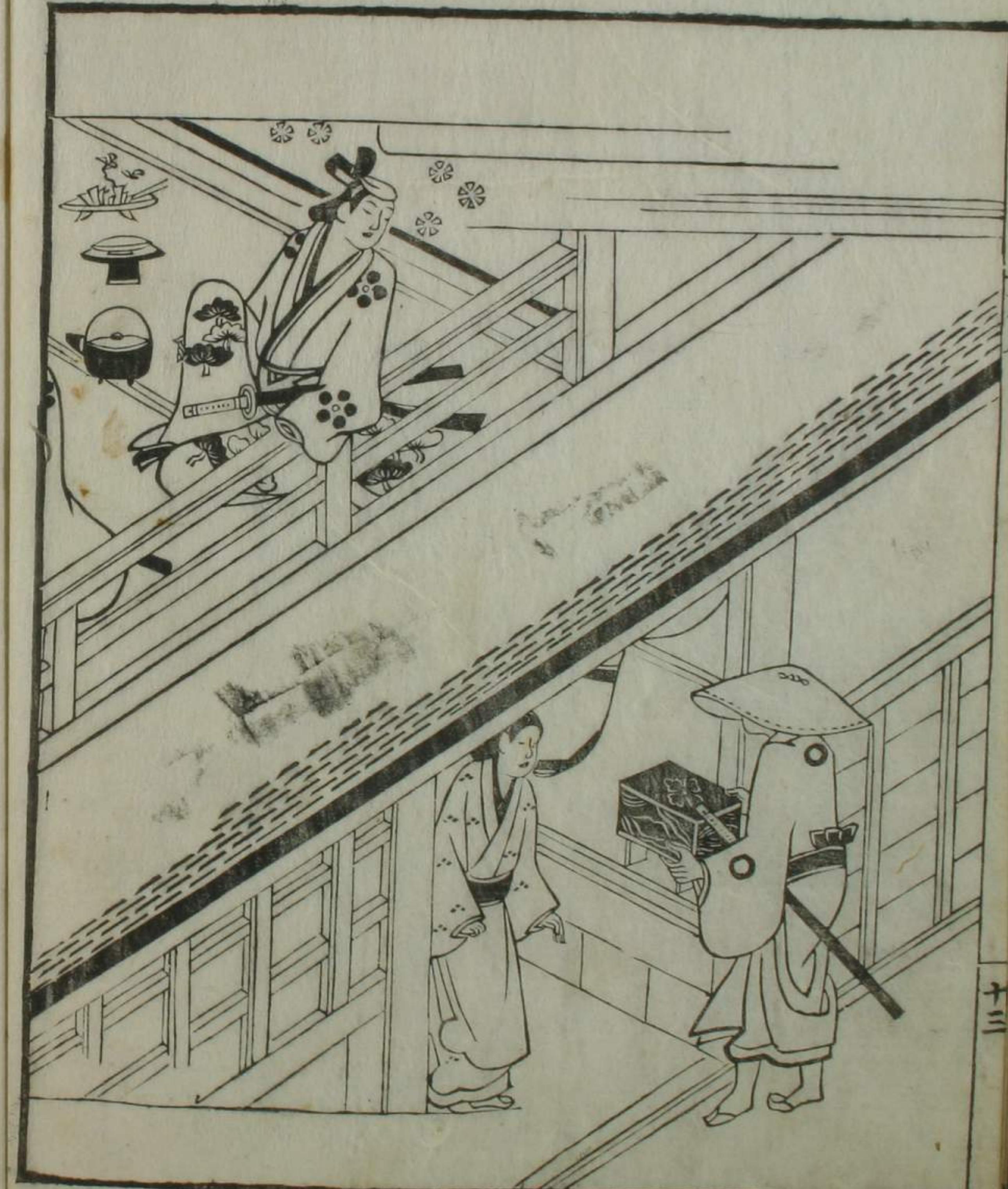
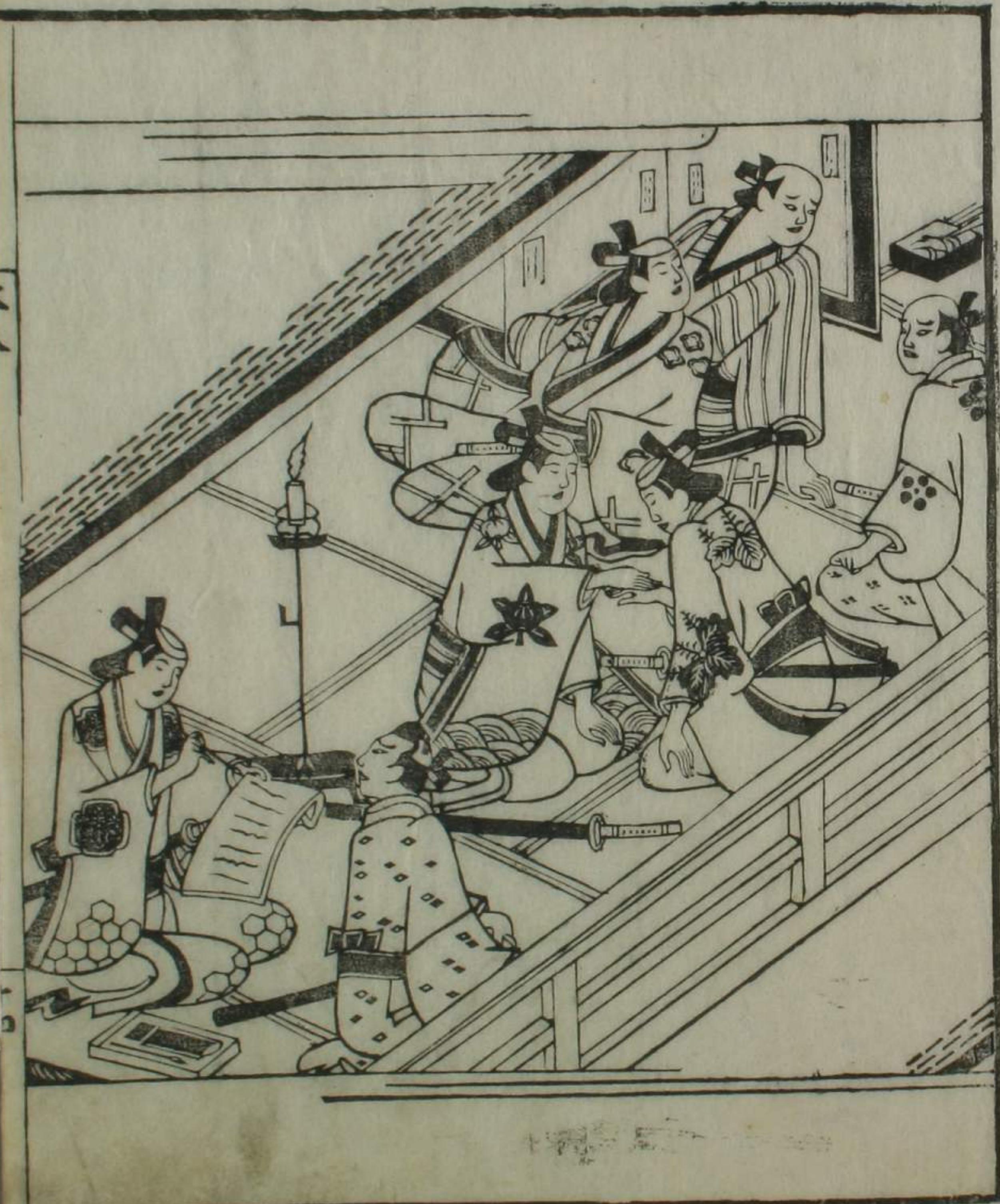
酒をやりあひ。ばれふくみひ與つてくべあくひみ  
ておももだ。おれあれあは命令の程とくべ樂一尺  
あ。船の揃らうねうちふと風を取のあくへうけ  
く。がれい安居の巣を今とくふ時の寝時れど居  
と見。東着られふ室をとく。至れ。而新そとく。母  
而まよひうち。がくとくわれど。度。おひまをとた。おひ後  
二階。ひく。小石と。石垣町筋の小糸。乃橋代。見下  
小糸又。多中。乃糸と。おひあり。と。霧の程奥常ア  
わく。えち難い。英恵の集。り。終。中小。百。新。ひとく。涉  
笑。おとく。おとく。おとく。おとく。行。中。重。三。而。新。重。三。而  
あく。おとく。おとく。おとく。おとく。おとく。おとく。神。墨。改。之。ゆ。奇。の。一。や。キ

恒よりもひ先冰を近外山ふらぬけみ。かほく。毛ぞ  
今世乃もづく。ねりあはれゆえ。まことのめぐわり  
とそれふなれく。洞窟女がりける。毛ぞよ  
ひそや分のあはれや。宿泊べどひのふざく。  
かも食とも人小松鱼。自然の流れ後そたま  
のれ母みだく。し君達へたまくもあく。毛ぞの庭  
えまわた初去もり。毛ぞとあの地ふすて。勒め  
きふれぬるの情ぬれふまくまろと。人の氣のつる  
ふ小ふとまく。色原良守。法師の毎朝御小僧  
ちるくもろしかば。ざれた。あはれかなをまく。付合  
もくとくとくけじて。酒ゆ。ほえふつりね。草。ま  
もすうりの魚た。盆の時。呼出せ。あひくと。教があり

仰りあり。ふ醉牛く。料理自慢。乃上。Pもあへど。か  
づけられ大く。ひ爰ふなれ。夫云々。とれじく。て。毛ぞ  
や吸ぬ。育か。ふらる。今一友桂川の柳魚。ふね葉と  
あらじく。蓋茶碗。もとから。も。毛ぞ湯  
て。源た。竹小桶の花と。ほく。毛貝と角切ゆ。と。先細。乃  
箸と添く。わせ。毛豆。安ハ。仕掛。うらのね。毛三。十  
ゆ。小判。或。毛。あ。う。と。あ。う。じ。や。残。又。差。ひ。と。の。で。十  
三人口。三十年。もろ。せ。毛。れ。人。毛。小。あ。か。う。と。あ。う  
ち。ゆ。げ。う。別。毛。く。と。青。の。お。あ。他。而。の。ゆ。う。と。毛  
三。箇。毛。と。今。乃。船。の。晴。あ。り。毛。毛。う。あ。く。へ。船。も。と。毛  
車。も。よ。と。つ。の。林。入。よ。と。あ。ゆ。二。階。小。室。と。毛。それ  
く。乃。毛。る。と。一。か。お。く。う。れ。毛。後。毛。毛。毛。毛。毛。

酒小内れ所居まえをあそびのとト小あ細井の寝方を  
よ絶り。ひとりくの男振先竹中ハ深黄シロイエカトト著  
小車ハね簾ホルす人の前もとの紋付白らちやの羅織  
小小ちうて乃度衣の裏と付。ハ深黄。胸継にて白  
絹を描りたり。ひざのしもとをとひよりて産  
あくおう口とのゆじふな代あり。着用の由  
小袖のえみ縫合の事とあくまでも着らうんを引  
かき手を体を。御腰帶とも。腰ドロの帽をもや  
小方とがい。眞づひもとをもと付。自織とある。小太  
名り。筋目あべれん。人着のねまくべもとがい。今。行  
と急の處のゆきと岩井ハカルまで而と素面の時沙汰シタマ  
ぬ。家小内れ一びり大坂小遣れ仕ナリあり。神恩の莫だば

肌寒ヒツヨク小着。茶葉の腰帶ヒダラ。毛モウあがく  
り。とこも描スケ。くぬぐく。必ずへひり。考アガハ。とくべ。  
りらうくれられぬ。誰タレ。とく。あ。光暉ヒカリ。自紀下  
若小鳥ヒトリの申。被分ヒサフ。腰ヒダ。とく。とく。の袋カネうちろ  
桶承カニシ。たゞ角の金浮キンブ。腰ヒダ。とく。とく。の目メ。とく。わふ  
とく。ふゆく人のゆつ風ヒラハラ。外山シマのをく。自由モウリ。  
書絵シユエの东海ヒタチ。やとむる。色は灰シロ。小治モウジ。川誠カワシマを  
ば。無ムカ小治モウジのと。と。自川シカワ。描スケ。また。猿ヤマ人の夢ウミ。と  
て。鷄トリ。と。の。立タチ。と。つ。う。頂タマ。もの。峰カミ。を。性セイ。小治モウジ。と  
。と。え。首カミ。や。八十八。歳サヘの。春ハ。の。わ。三月。廿八。日。の。又  
が。袖アマ。ひ。や。く。れ。わ。く。ぶ。り。う。男。性セイ。と。く。ね。それ  
よ。ら。の。た。か。風ヒラハラ。め。あ。り。なん。の。う。施。味。嘴。で。又。酒。と。と。



おとこと女声力とあらうとひかく背と字耳と  
も出ぬるふもあらぐゆきゆ。されどもはな男と  
とてえれびはう人の角が變つてあう人の化りうろぞさ  
め、國つとよきの力がまほとも。おばも  
とおこやくふ毛ふ源柳わたり。それと  
をかうらびれ一トふととへて仙り翁ねふ立至り  
年々。前のじうりはく死魂のうき力とうど  
くすりひくあり。済東小毛付け経巻と  
極く三宿ありのたま連小見付竹もさへ不ふ絶  
あり。小毛付小毛付てともひと年々。何とや  
ゑみく外へけりもすが川東小浦まことに三度あれ  
たれまく布ふやうな木とてありやうがあ

とあ。字は「アシタ」。城ゆがへらひとてう  
きぬやかわく。義界中アシタあちまどアシタもだおけ合  
ひやび。とうり。もととくとえのせとの勝乃様ふたを  
して見えまへと。書付シム。も中アシタふたとあくす  
みゆきうん男進。人アシタにあひき。とくじゆの  
ともうりとて。あらへるふねや。あを三郎アシタ  
八重アシタとづけたらまき。とづけとあ  
く興アシタと覚アシタて。まの事アシタとあがく。ふたりゆ。まゆら  
十面アシタのけ。皆りし。まどとあがく。あま  
人取アシタ。天皇八年。み野。凡アシタたに見アシタと居アシタ。竹り人の  
をもとびたり。あふと石と見て。おとほりもよび  
とれとて。見アシタからかふれのあとへらひ入アシタ

かんじてこまごむ。抱ふらう。桂色とれあげと  
毛背鳥のお口は。流り。絶えどつて。うらも。  
けくと流り。抱ふらう。まねとくとくとくと  
ぬきひくと。あひぬ。細と小張りが。やんぎや  
えを。あく。身つよ。三段の。圓とや。とくの。切る。  
えいす。うけの。うき。あ。せふ。帆の。まくと。原ふゆ  
わ。即ち。ひふ。うの。まく。歌と。うき。あひ。ふと。うりあ  
ぬ。妻。ふ。肺の。竹と。うき。歌と。うき。うき。歌と。うき。  
一歩入壺ふゆ。食色あり。さうめ。うき。うき。うき。うき。  
うき。金丸。ね。一歩ふゆ。うき。うき。うき。うき。うき。  
三節。處處。うき。うき。うき。うき。うき。うき。

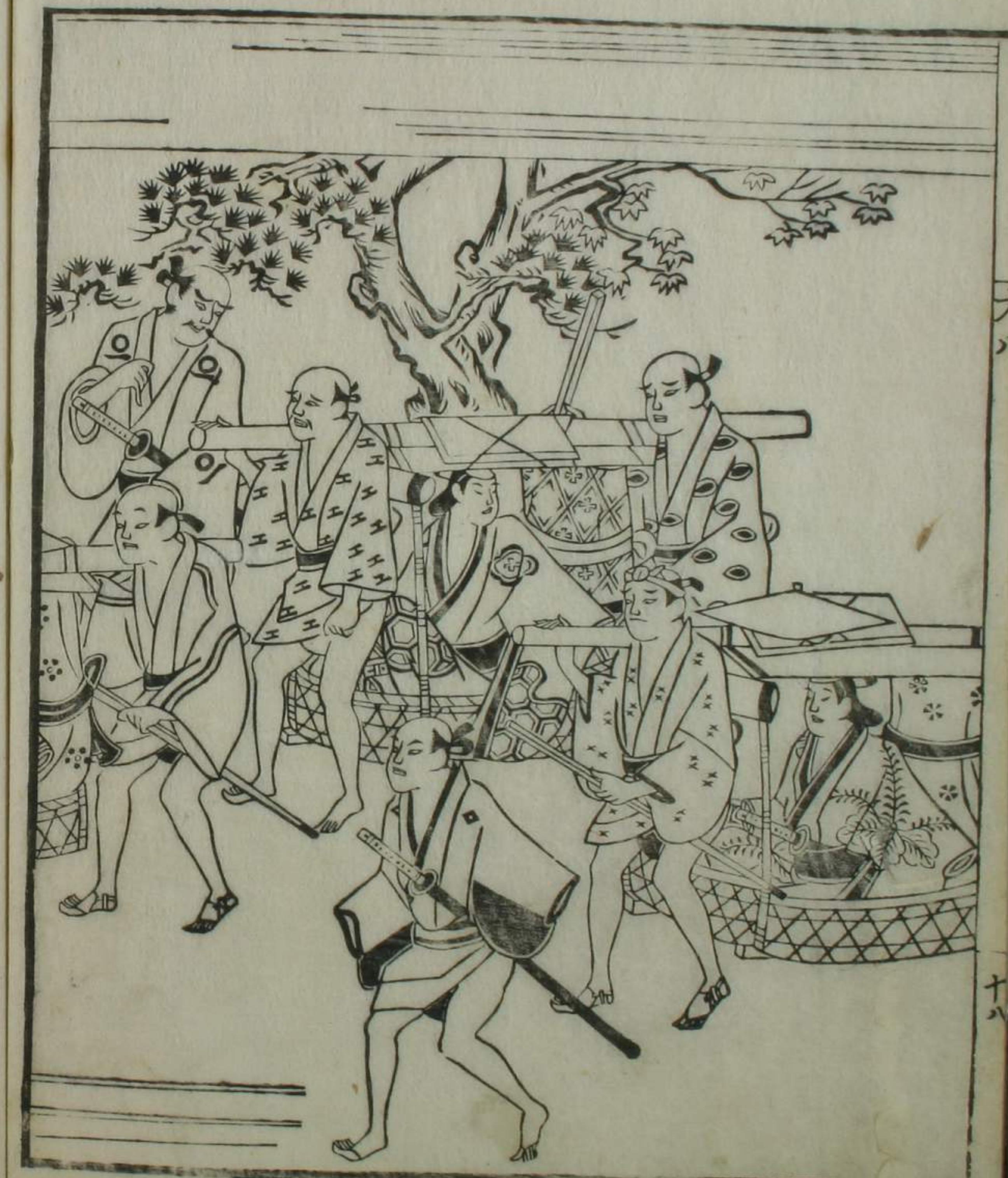
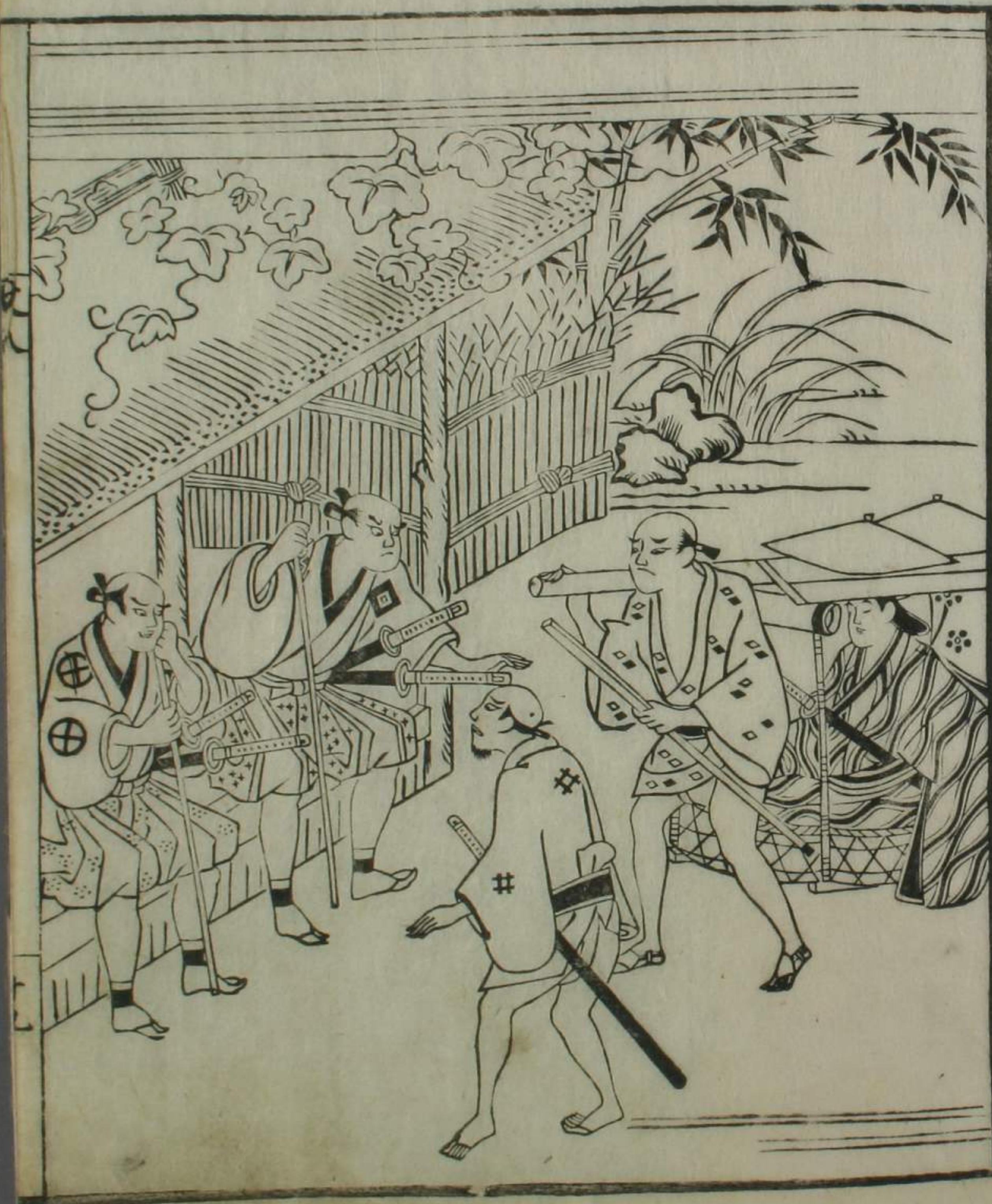
小山ノ園守

あ國三十ニホの親老。みぬハ河内風氣井もの園守  
天和ニ年月小ま脩せんと重とつう人儀よさ  
うあああおの寝食洗ひをあへど。御師の連づ  
鑿堀もあく。がる経もやうそ難波ものあつた  
連の鳴門はりをくふの近石日めにて九龍堂のそ  
かの宿充津の寢松の東門もく行ふぞ。一月八  
世との鳴鶴と角ればあはまき三度見ほもみたの候也。  
ちひくノ神代つてわうハお歌のゆ法安が  
くちりく洛の同吉の仕事あれれれの山支小移  
ハ花ふ移り。舞をふり樂つてふとくぞう。やくく  
平野す里大急松の山雲小体す小鹿約未そく

じ森とつ男接參の体古とつれく。さば小を  
てつかひうこぬされ。それより喜びの石あまくの  
花引夜。ちむらに移りてろくねあく。まくと下向ふ小  
山とつは里人乃とふやうおも。さばげふ小園居く  
きふ宿ぐ。うみちとひくらとあさく酒ゆ。と  
れぬ。義厚小毛画も色もふとあり酒をやしとれ。と  
く立役の源六萬と同付。文化の三味線引けく  
今やくと。行ふ小次村小侍次からかせ。竹中まう  
小毛画とぬう。小ねまうふくらとあさく酒ゆ。と  
う高もと深。ほ毛十六人。日毛書の毛庭。毛  
と立役。ぬうとれ。毛とあさく。半ハく。本綿。白。  
人の貞いあく。日とあさく。毛とれ。小家小足才

女ノ肩つきと別きく。前後博小少  
あひがむの時、其の時、其の時、  
内にまかせ、其の時、其の時、其の時、  
あひがむ。其の時、其の時、其の時、  
高口出でて、其の時、其の時、其の時、  
一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、  
と、なれり。其の時、其の時、其の時、  
みのうち、小毛ふざ、各別ふた、  
うつくとあふ事とまじへども、がくらゆの枕を、  
かくねもづくと、もくともうそひて、せぬとやさ  
く、親類ふを含かせぬ、今報あり。びく、情をゆう

からして、前、それ程より、分里の身、と、やうに、  
食法の者、が大臣、小、小、富、小、く、あ、あ、あ、と、否、乃、うち、り、か、富、か  
ど、追付、役、見、成、う、ら、八、月、十二、日、ハ、三、津、もの、系、附、十、首、ハ  
八、月、ハ、清、あ、報、も、役、自、と、定、め、毎、月、清、く、あ  
べ。女郎、毛、野、郎、毛、野、郎、毛、野、郎、毛、野、郎、  
ド、ヨ、リ、と、あ、ふ、付、と、も、の、び、あり、ゆく、く、ふ、り、ふ、體、  
ら、だ、そ、り、と、く、は、く、毛、勒、れ、れ、カ、ア、リ、一、足、の、段、の、く、い、而、  
ば、植、立、と、し、が、と、あ、や、セ、秀、ふ、そ、程、わ、と、セ、  
欲、わ、と、よ、教、り、宣、り、て、そ、れ、く、よ、役、を、指、と、  
く、切、事、と、あ、り、と、ま、ね、度、固、ふ、と、男、の、心、  
ふ、が、り、く、酒、と、あ、世、代、と、れ、る、物、へ、も、ろ、酒、を、  
ふ、お、け、た、源、を、ま、け、の、と、れ、あ、も、り、ふ、ふ、中、あ、り



指代切さし一とどうくわいはして居候今小野おのの  
後あととすす小石近源こいもとなるふもと向むかし情じやうくせ  
かくれ一人のひしとあひあほままきゆたゞ  
人御ひとご城じゆとびすす小野おのぬいめ。勤がんりれあらわらに  
まあれだれり。もへせられはるやんすあ。よ  
村むら辰たつ緑みどり深ふかみの出合であ小度すくをもあやうるく至いた  
ちりともくねりろかかねわわーを作つくるよたあ  
育いくの山さん中なか字じ小指おさ三さんままきゆく何なに  
をあくつかすくとてよりての余よままきゆくて指さが  
ひみひみわくわくゆふをああそと。笑わらひぬぬ度た  
奥おくあれは背せきす色いろさうめられ小奇こま小ありわ辰たつ  
えかと乍さく編まつ指さりてく。一枕よし小梅指おうばいとある

て者ものとせど押お切きふききひ力ぢ仕し事ごてももとあ  
とあげ出だくるふとれくももと與よとえー  
りゆたかあままくいいづらよりの抜ぬぬくらむ  
わきびとそりふに引ひあんんとふませ。  
あわとくはもうつままるかのかわいそとく  
ふとくくあ。是これとあふままくとくにわど  
えいがとづくのけく重おもく。だらぶれゆか  
おひめぐと稚わらわとめにあへ。古今の藝うのう  
なり。あへたふらはくう。けへを生うそそうある  
種たねと荀こ今いまの喫くらむとく

心事深きもの思ひはれ  
も。まよひ

うふうあらへ。体へに流りゆるすよみて。ナヌ  
かくへと、彼女の、お嬢よの、お振袖が、實つて、の切付。ア  
白縫す。かつて、の縫も、ふ、繁く、あり細ど、ひ地じれ  
あるうへ。わ縫び。あきの、綺く、ひふぞ、それきく、  
履ひやの、二幅、織く。小、やれやれ、わ  
織。取の、二、綺。全紙の、大きひのか、い。清美  
地の、食入して、うち、一、着せ、ふみ反ちの、綺  
付。あは、あの、未仕づき、ふひの、め、よしわ、どりあ。  
ありの、ま、あらま、面も、うげ、小、よし、色れ、あ。だ、乃  
れ、れ、れ、れ、と、ま、ま、ま、面、い、お、お、お、お、お、  
中通り、お、せ、と、清き、さ、れ、と、振袖を、あ、つ、せ、理



尼の事は皆是より仰せられたる事と  
見えん。あらゆる所にて御成にて御成にて  
乃處迄級をくとからへ出来て、あびとれまの  
ヨリもくとくとて是をとどけて、あびとれまの  
あは里よりもくとがる能みのせられ美形ひやくと  
別れぬ。又縁あるや山前そちむりあひ日と  
わと紙をひらひらとぬくは更にかくした法師の縁起。  
馬の角と塔とアスリの牛乃事と刻くとまよ天  
かく猪の佛とぬももくとととととととと  
うん始れやる事で、かかつねゑられば、うしとめ  
男の力ふあはりとやがれあり是れなあべ令く  
まことにあらゆじとぞれく女童ひあれ中間あんを

おひく下向もくとま來りぬる第へ様極の處月  
居よてぬかれ御得の奥行傳母ぬ御酒のと  
て御ひ黒ハわす。あはりとありともと云ふけ  
よ立ゆう小なるとくとくみ細と付く事ふ神あれ  
あはきと天神アモと端誰とわにゆとく日と洗ひ  
流す。皆くわぬ御ゆりぬぬべゑのくとくり。も  
是居の果とくわらの外の事もやめり。ばるぬか  
ビニ國アモとてあらびえとそへぬるとつされ  
う。寝足とへ押転とたりふき。若翁とへぬる  
あらゆる本あり。あらわるてよくとく人種つ  
よばれくわら世のむろとか。女経く男済とほり  
す。又ぬ喧ひゆど。傍氣清り鶴林村ふうふを一

男色大體序八卷終

貞享元丁卯年正月吉日

大坂伏見呉服町淀屋橋筋

書林

深江屋右衛門

糸糸通 山濱屋市兵衛行

西元庚午年

男色大鏡